

川野里子選

人生に転んで顔まで泥まみれいつかどこかで見た神様だ
(和歌山) 岡田 信也
思い切りスワンボートをこぎ出せば一人ぼっちのみずうみがいる
(札幌市) 橋 晃弘
右に向き左にハンドル切る君は僕を揺るがす力を秘める
(加古川市) 畑 啓之
一家には一台というたこ焼き器別れる妻の荷造りのなか
(大阪) 渡辺たかき
龍年の妻は自由に飛び回る空想上の生き物である
(戸田市) 蜂巣 幸彦
浄水場跡地に並ぶビル群は穴の底より立ち上がりたる
(東京都) 野上 卓
研修はいつの間にか終わって責任だけがぼくに残った
(東京都) 富尾 なつ
社員証正し席立つグループに謎の風立つ午後
(日立市) 丸茂美保子
紙パンツ取りかえスポンを引きあげて今度は父を育てておりぬ
(和泉市) 星田 美紀
カップ麺8個のレシート図書館の本が誰かの人生挟む
(熊本市) 桑原由史子

【評】一首目、泥まみれの顔は異国の神の面のよう。最悪の時の自分に宿る神がある。二首目、静かな水面。湖こそ孤独だ。三首目、駐車場のハンドルさばきを言葉にするとこうなる。凄い。六首目、泥を鎮めた穴から立ち上がる力強いビル群だ。

佐佐木幸綱選

真つ黒で丸くて弾んで三頭で親子のクマが横断したり
(盛岡市) 榎本 拓
湯をたててゆっくりいれるミルクティ 四十三
三年の勤めがおわる
(横浜市) 福島 信子
其処此処でボキバキ骨の鳴る音が聞こえるシニア体操教室
(船橋市) 藤本 典裕
これがかのマツケンサンバ目の前に歌い流刺元気をもらう
(横浜市) 森 晶子
電子レンジ冷蔵庫ガス洗濯機亡母思いつつ注意書きはがす
(桐生市) 久保塚文子
そつでなき者が居るごとく声高に「働く」と言ふ女性総裁
(さいたま市) 齋藤 紀子
剣道は練習じゃなくて稽古だよ息子は少し自慢げに言う
(秦野市) 三宅 節子
宮島の鹿と奈良公園の鹿つなぐとて知らなかつたよ
(奈良市) 山添 聡介
鬱の字が書けるのは内緒 短歌にだけ打ち明けスマホに仕舞う
(東京都) 木村 美夏
流れ星見たことあるという人の共通点を探す飲み会
(富山市) 松田 梨子

【評】第一首、公道を親子三頭の熊が横断する場面。スナップ写真のように表現して、成功。第二首、定年退職する朝の一首。「ゆっくり」に万感がこもる。第三首、シニア体操教室をあえてユーモラスに表現。「ボキバキ」が可笑しい。

高野公彦選

命とう稀有の存在生みし星生みし命に蝕まれゆく
(川崎市) 持田ひろ子
詐欺やデマ悪意が閉じ込められているスマホさながらパンドラの箱(吉野川市) 喜島 成幸
スマホ見る母に抱かれる幼子は母親を見つ笑顔をみせず
(観音寺市) 篠原 俊則
乳母車押す母親もスマホして瑞穂の国は指先列島
(城陽市) 村上 純祥
クマよりも恐ろしきものヒトなりと教が教える戦争犠牲者
(五所川原市) 戸沢大二郎
中秋の名月写メで入院の夫に送るてもにめる月
(北九州市) 犬塚 久代
猛暑日の怠惰の後にようやく虫の音のなか名月を見る
(箕面市) 北野 健
義弟より届きし新米病む夫に五分粥炊けは厨香にたつ
(下野市) 若島 安子
卒寿なる父は生まれて初めてのバースデイソング歌われて泣く
(相模原市) 石井 裕乃
ラテン語の名札に樹々も誇らしげアカデミックが香る北大
(札幌市) 田巻 成男

【評】1 首目、人類が地球の自然環境を蝕んでいることを憂える歌。2 首目～4 首目、スマホは便利な機器だがマイナス面も多い、と。村上さんの作は「指先列島」という言葉が面白い。5 首目、熊の犠牲者と戦争の犠牲者の数は、全く別の世界。

永田和宏選

こんな指示されたんだよとAIの酒の肴になる日もちかし
(東京都) 富見井高志
AIはいずれ意識を持つだろう こともなげに言う若き研究者
(大阪市) 清 富佐子
オムレツの大きさを問う口頭でも注文できますという店員に
(名古屋) 植田 和子
久々にカフェで話した教養子は「オイシイノケーキ」の「ノ」が消えて(横浜市) 平山 聡
「乗ります」と帰省終えた娘のメール京都辺りで戻るか母に
(佐倉市) 設楽久美子
学会で昔のボスに会いました四児の母を何よりほめる
(アメリカ) 一杉 定恵
太き鼻子象のはらの下に入れ支え立たせるメイ母となる
(広島市) 永井 歌歩
小望月という名の月が暗暗と湖面に揺れて君をも揺らす
(岐阜市) 木野村暢彦
投げ銭について手を出した馬の足喝采浴びた村祭かな
(吹田市) 太田 昭
いつもは着ないピンク色のワンピースわたしに買わせる恋というものの相模原市榎本 ハナ

【評】AIのこれからを危惧する冒頭二首。意識を持つようになったAIの酒の肴になる人類とは笑えぬ笑い話。三首目は現実と広がるタブレット注文だが、「口頭でも注文できます」が皮肉っぽい。四首目は外国籍の教養子の日本語上達を実感。

朝日歌壇俳壇



〈日曜日のブローチ 28〉 junaida

俳句時評 帰還せざる兵士の句

岸本 尚毅

栗林浩『還つて来なかつた兵士たちの絶唱』(角川書店)は「戦後八十年」の節目に、戦時下の俳句の様相を描出する。
〈出撃や特攻日和の聲 岡安明〉は一九四五年四月に「沖縄西方洋上」で戦死した二十三歳の特攻兵の作。沖縄には四月に鳴く蟬がいる。
〈薬瓶に柳絮舞ひ入る二度目かな 山本北溟子〉は一九五四年にシベリヤで病死した抑留者の最期の作。「柳絮」とは風にのって飛ぶ柳の絮だ。

〈月光とあり死ぬならばシベリヤで〉は戦後の俳壇で活躍した佐藤鬼房の作。鬼房は南方で捕虜となつたが、病気のため労役が免除され病院船で復員。その鬼房が一死ぬならば「シベリヤ」と詠んだことを、栗林は「自分よりも厳しい環境に投げ込まれ死んでいった多くのシベリヤ抑留者の申し訳なき、慙愧の念」と解釈する。
〈汝等老いたり虹に頭上げぬ山羊なるか〉は、あなた方は老いた、虹がかかった

ても頭を上げて見ようとはしない山羊なのか、という意味。「時局」に迎合的だった当時の俳壇幹部に憤慨をぶつけた句だ。この句を詠んだ中村草田男を含む俳壇の「厭戦者」たちに対し、特高警察の協力者すなわち思想の弾圧者として立ち回った小野燕子という俳人がいる。本書はこの俳人にも一章をあてて、本書は四章から成り、各章はそれぞれ戦没、抑留、帰還、思想統制を対象とする。戦時下の俳句という事象を広い視野で捉えており、逆にいえば、俳句を通して戦争の一面をうかがわせる作品だともいえる。

林桂句集「遠近紀行」 第10句集。2017年から24年までの394句を収録。未発表作品も含む。「太古より日輪遠き童かな」「大さ鏡に向かひて歩む秋の暮」(ウェブ・2970円) 夏井いつき著「NHK俳句 夏井いつきの『凡人俳句』からの脱出」「NHK俳句」への投稿句を解剖し、発想と推敲の秘訣を公開する実践作句指南書。(NHK出版・1650円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます(週に2作品まで)。QRコードから。

風信